能諸詞林抄

中村俊定文庫
文庫 18
880

宮内省圖書寮

宮内省圖書寮

中村俊定文庫

序

第七世宗匠中巷の主水旭子孫あつる頃朱抄として小冊を拙〻寄せ給ふ此の紀行ふ
冊きうんでるかよ形ひ和歌
くもる道をたどる先達の吟
之能本もて門弟をらの名詠
日まれしのまかふふるく乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

序一

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

専ら近来の流行にうつりし婦
をあそび夕にもてはやさるゝは斗の
きりの舞や踊者に芸振しく
かはしく末たのしむ孫化也と
嬉しやおひとはふ形のくに形て舞

花隠居述

俳諧の花ともいふ奇の一體なれハ弄ぶも
初よりいにしへ風来に余あれ其の行さる近世の
世々を経て書頃のして後の世に歌ひならわしたれと
其人ニ言てまもに行ハ歌誰ゆゑく俗語の語に
やうあつかひなしと思ひそめり其葉のおのゝ
むきく ふつをなて漢字毎の詞をましくさしひかえそ
言語をとりて其かたの中に成申さるれハ 其の

世に名ある事にしられかれく見る人の多きと
様々していひ出ることの形のごとくなれども何れも其体
俳諧の発句は其いのいの詠みさしのさ奇なり体
かくに奇の正しき志を風にみてハ其之にはしらる哉
蕉翁に住也のされたとさて此心に旅いの継踵いや
しきを陀く志る事の多きハ今我に今其これ楓内手
のあるし年比先師雄風翁につきて学ひ桃波山

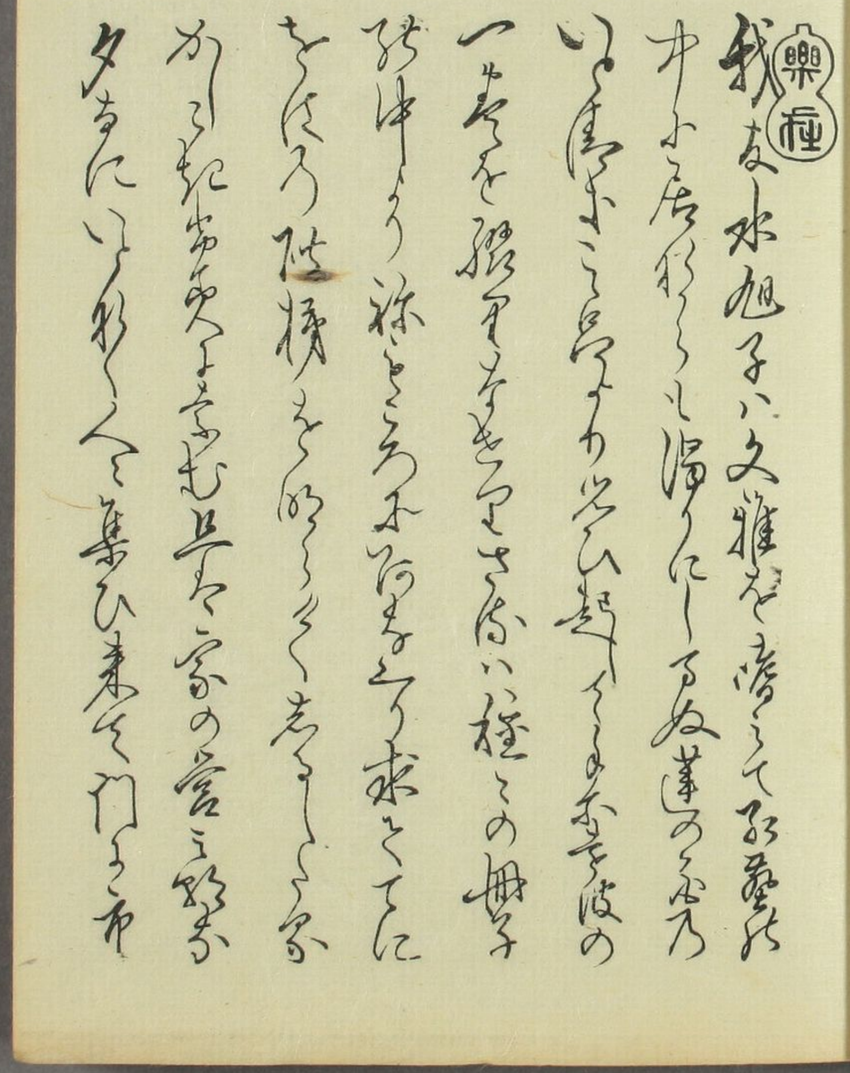
其の山吉けみつけつ日も陀の禁に来て手紀
難波紫列く其をとえ下みなもの海の磯の吉浜貝を拾ひ
あつめて武蔵野く芦ずの牧吉けり行ける其の宗武庵の
梅木下花ゆかしき木のかけ下形く世に傳えて来たる
袂しめに到く言を立てよる道一にハ形み此のいあみつる
流ふるる古集く此中の清名深くそくのことも此道
継緒の陀も定仁難波のかくらに結び留の其名あり

あるを見つくやも形くさびたる落葉のうてい所へ
忘れたるをあけ紀者
皇恵の書と学びを三びきくの文ともばあがりと
書て初学びをこ書初れたるをあるきしばをて
いそ村井也雀の也下かりあくおるのふつおたる
こうば西

紀花四季ふ子の巻

小蓑菴　風爵

序四



我友水旭子ハ文雅を学ひて彩毫
ナホ居れ[illegible]し海ゆにして反業乃
ひ[illegible]ふ[illegible]ハ起[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]波の
一巻を編[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]の冊子
題[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]て求[illegible]て
を[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
かり[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
夕[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

序五

詞林抄自序

夢ノ紙背の歌句書きとゝめとて
遠波の法格我初めて詠まあひしうち書
を見て依ってこれをもあつめ抄を
ひけり五儀六義の口訣を窮し和歌
其角嵐雪等れ句を集め書和
歌を徒ら仮名遣ひを知らむこと

[illegible]
を稽へ考へ[illegible]小冊とはなり今や
[illegible]
時代に生れ[illegible]鄭山[illegible]浦のあま[illegible]巻
[illegible]
[illegible]
[illegible]一巻[illegible]たるもの
[illegible]に書[illegible]

序

[illegible]
皇國の言葉[illegible]
[illegible]其格[illegible]今[illegible]
[illegible]毎[illegible]武[illegible]
和歌[illegible]の人[illegible]
秀句[illegible]
[illegible]弘化四丁未の春[illegible]

まゝ庵社主人〜発

楓川亭
水旭

俳諧詞林抄録

一 我の部　てふをたをのゝ
二 餘情の弐の部　くもつぬふむるりきゝ
三 たの撰の部　十八 十九 二十の格
四 るの撰の部　くもつぬふむゆるやきゝ
五 徒の部　くもつぬふむゆるやきゝ
六 ぞの撰の部　くもつぬふむゆるやきゝ
七 けの撰の部　くもつぬふむるるきゝ
八 やの撰の部　くもつぬふむるやきゝ
九 切やの部　くもつぬふむゆるやきゝ
十 疑のやの部　くもつぬふむるきゝ

十一　歌集れやの部
十二　云ひ撰のやの部
十三　呼ろるやの部
十四　やゐの　部
十五　捨やの　部
十六　餘情のやの部
十七　何の撰の　部
十八　ひぞの結ひの部
十九　何　の　部
二十　ひと孫字の　部
廿一　ひ除情の白の部
廿二　ちと孫字の　部

十八十九二十の格
くもつぬふむるき〜
あふろ　いく　いふ　道
あふぞ　たそ　たれ　ないふ　いぞ　ゆぞと
いま　いち　いぐ　ゆち　ゆ　いく
あふ　たち　たま　いく　ゆち　れ　いち　まち
十九　二十の格
てふをとものぞとき

廿三　ひ　の部
廿四　し　の　部
廿五　二世一白れの部
廿六　月除情の部
廿七　三世れしろ部
廿八　二世れぬろ部
廿九　二世一白れぬの部
三十　二世れきの部
卅一　二世れ又の部
卅二　れ小二やうの部
卅三　つ小二やうの部
卅四　むふ二やうの部

てふをとものぞとき
てふをとものぞとき
ひ去　現生
ひ去　現生　未来
ひ去　現生
ひ去　現生
ひ去　現生
ひ去　未来

㐂五 ゑ結び結の部　けせて祢へめを
㐂六 月除情の部　十八十九の掛
㐂七 下知の部　けせて祢へめをなよ
㐂八 俳諧の句の部　十八十九　二十の掛
㐂九 文字余りの部
四十 云掛り少し結ぶ部
四一 このもの部
四二 ゝハの部
四三 さぞの部
四四 ゑその部
四五 ゑつめの部
四六 を足しの部

四七 廻しの部
四八 大廻しの部
四九 やゑやゑりの部
五十 重てふをえの部
五一 二字切の部
五二 三字切の部
五三 廻文
五四 物の名尽し留
五五 和歌その掛の部　くをつぬふむゆる
五六 月れの掛の部　くをつぬふむるきゝ
五七 月やの掛の部　くつぬふむゆるをきゝ
五八 月伺の掛の部　くをつぬふむるきゝ
　　くをつぬふむるきゝ

五九　こその撰の部　けせて祢へめさしらら
六〇　月下部の部　かよ
六一　月なその部
六二　月重ホとそれ部
六三　假名ばなひの部　いろは四十七字 一云より五云まで

目録畢

五義の口決

定家卿の説ゆゑの所に貫之宇佐の宮に参詣して歌道の奇逸を祈りし時夢の中に小五人の歌仙ども居ならびて一句づゝ

あをやぎの糸のうちなびく春の来ぬれば　猿丸

あをやぎの糸のうちなびく春の来ぬれば　赤人

あをやぎの糸のうちなびく春の来ぬれば　黒主

あをやぎの糸のうちなびく春の来ぬれば　小町

と詠ずるを聞て人丸は赤人を黒主と小町とを

篇ハ　人丸方ふる物語なぞ侍べる

序ハ　中次なぞ侍べる

題ハ　此事ゑびに来る躰なり

曲ハ　ゑびそめ式事ゑびに躰なり

流ハ　いとゝゑびそめ五のゑる躰なり

和歌ハ

春過て篇 夏きぬけし序 志賀の浦波の題

こゝろもほそとてふ曲 天れかく山流

發句ハ

益見れば序 青苔動かぬ題 ほゝゑむ初流

句毎ハ句ごとに序 序歌曲流と次第せるものゝ次上る曲流に次下る序

歌なるも有とぞ連歌曲ハ如何のあるやゆゑと問ハ先達の語りハ世平連歌

俳諧の家風なり 和句曲流ハ発句序ハ次流もべと連歌の

和句長句曲流 引句ハ

うき泥鰌乃子れ懸ゝ一かゝ一くゆ哉

附句短句序歌

くるゝ人春さゝ古郷乃人 青山

和句短句曲流

撿校ありたい付ゝ語乃新

附句長句序歌

さゝと月も輝く四間乃青畳 溪石

連歌俳諧ハ上ハ句ハ云捨て下の句ハ懸乃ハ云ハ上の句に云ハせつ

ぎ云ひのこゝ云ハ云ハ云ひ云たる人感情発送有べ云ハ云ハ

六義乃詳論

風ハ そへ奇とよむなり

賦ハ かぞへ奇とよむなり

比ハ なぞらへ奇とよむなり

興ハ たとへ奇とよむなり

雅ハ ゝでこと奇とよむなり

頌(セウ)ハ　いはひ哥とよむなり

これを六義といふなり六義とハ一句のさまをさふによりて撰れべくの躰にかゝるなれば趣し先哲の句に

風　先いまへ梅咲くら塚乃色　翁

賦　ちるき散て花に香ふる岩根哉　樂不知

比　鶯れ和哥三神や月日星　李吟

興　盆燈篭月を隈なく花盞　挙堂

雅　春雨れのはのりやて降に汁り　鬼貫

頌　掃ふ氣に神もこゆる人拝この章　鷺水

右乃説と引句れたゞさふによりてそらで知る是し六義のわかちまちくなれどもいずれも此道の奥義なる歌連俳とよふに唯風志一字にこのまたるより諸書にしるえより

句作の秘決

帆亭徳元の教訓に俗語をもてかるしといへどそのわざ浅分別しくきてもべしとて宗鑑が犬筑波にし

ゆくのくじくとをきのしかりけり

我親乃死ぬる時にも屁をこきて

といふなりこれを貞徳判の詞はいふに俳諧なればとて文母し恥ある事もある道よりのぞぎるを撰者なりにて引出し入ざるぞや歌もさらなり連哥俳諧もこれ人まんなく義のそしりになるゆゑにん浮ざるハ句の本まれわるゝても論なきと知るべしとかくおよそ雪月花ハ歌道俳諧の命なれハ是とおもて何をぶまさるを身一ともべし前るへいふに附るても花ちさおもしろうらハ月ちてえどころなきなど山あく背べからハ最長の

白川右節をもとゝし父子其分を孝とし君臣不忠不義
の句をよゝぶべゝ無乃句ゝ情を本やゝゝ人ゝ感るとも
永人我ワもとゝ白本意ゝたぶりとゝ

手爾遠波其説

歌連俗言の小者一てゝをもの根をよくゝ知りゝ法ゆく
ゆも世人とゝ者ゝ我ゝ白我せゝゝと人が〻雷ゝ八雲ゝ抜ゝ
歌我元初り仏法る事ゝ道ゝ玉極ゝりとゝ
人丸の出詠ゝ

ほのゝゝ明石の浦ゝ朝霧ゝ
島ゝかくれゆく船をゝ惜おとゝ

と詠ゝあひゝとゝりてゝ俗の四文字ゝのゝ中の四文字ゝ発て
口吠あるとゝゝど白地ゝ述ゝゝゝ依ゝ略ゝ

祖翁の曰俳諧ゝ言の我情むゝ我要領ゝ自他ゝ観相ゝゝ
物我あゝもむゝ草本ゝ和ゝ心ゝ獣ゝ寒暑ゝ
道ゝ部ゝ色ゝ児ゝむゝゝ雅ゝ一句ゝ
あゝゝ不便ゝ部ゝ雅ゝ一句ゝ
とゝゝ世ゝゝ哀楽ゝ杖ゝ
たゝゝゝ俗ゝ姿風情ゝ俗ゝ雅俗ゝ
色ゝゝゝ

古哲の曰初心ゝ人歌を浮ぶ先歌ゝ詳ゝふたゝ且古
哲我流句をも問ゝべゝたゝ人ゝ浮ゝ歌ゝも問ゝ時ゝ又物我
人をも学ゝゝゝゝゝゝ歌ゝ物語ゝ事ゝ君ゝ下
聞を恥ゝと已ゝより先達ゝ人ゝゝゝゝ若輩ゝ人下ゝ者ゝ去
いもゝゝゝゝゝゝゝゝゝ歳ゝゝゝゝ問ゝ色ゝゝゝ

初言	体言	用言	全言	助言
あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や	い	ゆ	え	よ
ら	り	る	れ	ろ
わ	ゐ	う	ゑ	を

一 二 三 四 五

アカサタナハマヤラワ
永此十字則皆生阿音
イキシチニヒミ井リイ
此十字皆生伊音
ウクスツヌフムユルウ
此十字皆生宇ノ音
エケセテネヘメエレヱ
此十字皆生恵ノ音
オコソトノホモヨロヲ
此十字皆生遠ノ音

父字母字の説は師傳を待べし

一 初字ようゐぬの切字ふるべし
二 体字ようゐぬの切字なり
三 用云の切字なり
四 全字ようゐぬの切字は切字の三なり
四 四段の活用タンチタツタテ
立段のカヨテ サフ ゑど皆俗言なり
雅言にあらず

もも徒の

徒 ともそのや伽の

のハ切字のなり

徒 ともそのや伽の外のかりをこれ徒とゆふなり

のハ重ねのなり

伽 ともふ ごと なそ たれ さが いか ふ ろ ゆ
いぞ いご いど いそ いぢ いら

ぞのや伽

ども

切字 くもつぬふむゆるやきー

下知 けせてねへめまるよ

助辞 てゐをは

過去ー ぬー ゐー ぬぬー ぬー ぬー ぬー ぬー ぬー

現在ド 白ー 来ー 来ー つー 来ー ふー なー 遠ー

未来ド ぬド せド いなド きろド きろド ときド ねど せまド

△ドハもの活用なり

過去き ぬき ゆき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

現在き あさき ふき ふき ひき ふき ふき うき つき

畢ノぬ さきぬ ちりぬ ふりぬ ぬひぬ ゆきぬ あひぬ ゆきぬ さりぬ ぬぎぬ

不ノぬ さらぬ ちらぬ ふらぬ ぬらぬ ゆらぬ あらぬ ゆらぬ まらぬ

古人の訓られるは俳諧を志あるものも朝夕の詠ゆも世は常なる
習ひを銀〜に示義悲哀さ〜詞やさ〜哀情なるべかりゆもの〜く
しきゆるまひなく風雲草木花月情景ときはの〜に〜不古不
孝の者も俳諧を世ぬ人ゆもをとりたれよりは古書を〜ええ
うされは身の〜ど我ちり〜餘力ある時に俳諧はもと
となり
猶後篇を別〜此冊よりしたる發句に種〜の辭をのち
ある事〜俳諧去嫌神祇釋教恋無常等の詞四季
の事寄其外月花の名所〜後哥後句我引〜女
童の名男うん為に俳名文字をあ〜記〜ぐ〜ぐ
ものよく無人よりえもるにあらず孫はれ〜る我に
なびもはの〜たるをうるさ〜とる思ひ〜まひそ

俳諧詞林抄

て

花咲さく　七月　嘉名　梵天　南
郭　長者　隠居　我　地獄　踊る系
菜の花　〜ちて　麦　雲雀　うる

か

営の身　さのさま　初音　うる　那
垣　越　〜物　うちう　系　桜木　うな
雨　にち　身に　あつま　踊　手
永き日　我さひ　〜りたね　雲雀　う菊
法華経　乃　穂に　出る　身　名　残　我
七種　我　二三　段　うの　さま　首　うる
名月　ちたえ　さ　我　脱　乃　火　この　我
夜に　我　さん　棄　色　金　さ　花　火　この　我

を

芭蕉翁　其角
蓼太
其角
蕪村
萬里
翁

る

其角
嵐雪
仝
白雄

も

高燈籠昼はものうき　柱かな　千那

をろき人はなとへん葉も　夏野哉　翁

こゝろしも新らし匂へる　蕣かな　其角

の

茶乃湯とて涼しき月も　磐吉哉　亀翁

青柳のどろに志だるゝ　汐干かな　翁

手れ山のね脊中を梅乃木　振哉　嵐雪

村雨の木賊にこぼれ　暑かな　其角

こ

春根ふかきとあんでふけるさつき　かな　仝

知る人にあはじあはじく　花見この哉　去来

我事と鰌乃にげる　根芹かな　丈艸

く

巣をこぼれ声すぐ口あく　雀かな　尚白

蕣ぬらく蝶氣の涼しき　垣かな　卜枝

せ

鯰川門にふれゆく　柳かな　白雄

さ崩くのつをまひ出て　椿哉　翁

山畑乃茶摘とのさす　夕日哉　重五

つ

七さかりの菜つみ出る　雪間哉　土芳

猫の子乃くんづほぐれつ　胡蝶哉　其角

山伏の火をきり出す　師走哉　嵐雪

ぬ（不）

狗拳の言葉耳よし　氷るかな　玄鷺

こし筆の蹄きえぬ　この寒さ哉　昌叱

能月見ざれさ遠ぬ　頭巾かな　仙化

ふ

梅の花見の氣にいらぬ　氣色哉　越人

雲雀より上にやすらふ　峠かな　翁

麦乃穂も出揃ふ　卯月八日かな　琴太

(む)

其れ戸小家ハ春 食ふ ほうるのる

麦の穂をたゝうて はるむ別きうる

花咲き松へ きこむ 蕎うる事

滝法ぞへ 命なけうむ 小鮎北

(る)

雷れ釜 おくうる 桂 この那

舟あぶる 岩 も 秋乃中へ 武

二股 うて 高 矢 野川北

(り)

底より 元 来る 雲 かうら うる

時 雨 滝 より このく 乃 渡 この奈

元 元 元 の 花 ちぢまり 接 水 北

(き) 現

おをうろへて やぐくうて 九 鶴 糸 北

一 あう 茶 火 るも なるひう 北

其角 蕪 嵐雪 為有 蕪 嵐雪 白雄 石口 丈州 嵐雪 蕪 千角

(い) 過

世乃梅の散きゝ 春き。二月うる

ち 稼りをもも 春こしく 棟。 柳うる

ある 傍乃 蝶ひ。 花の 都 丁 ハ

武ッ 三ッ 文 若 うい 進。 蜜 うな

(ち) (元) (元) (元) (元) (元) (元)

○餘情の北の郊

おう後 ち ハ 松 ハ ろ さふ 角 ち う る

立 ゆ り く く 人 ふ ほ き ま く 。 孫 一 の 奈

左 角 中 う る ま ば な ひ く 。 階 面 我

麦 食 ひ 一 屋 と お う 人 と 別 丁 ハ

並 松 を 元 う け て 。 町 の 暑 さ う る

水底 残 乃 く く 来 う 角 の 。 小 暗 う 事

麦 乃 花 た う ろ む ま て 。 つ の れ う 郊

尚白 湖春 凡兆 志休 其角 去来 許六 野水 卧牛 丈草 越人

三 その掛の部

く 郭公待てど後もとゑ渡りく
き 月は雲出るも宿の星の玉 義年
て 世もこのれつ榎の下れおこ来 豊
つ 嘗れ時日も風をまぶりまりぬ 木阿
ぬ 年 渋柿やひと口も喰ふ猿の面 乙田
ふ 榎の葉丹ふ人来よかるの月はもむ 翁
む もるこだれ傘の破れ星もゆ 樂飢
ゆ 新八谷子もる山石の紅ほゝきく 了阿
る 笠ゝくもる二階ふ森ゝるもきく 正由
て 稲はむや 昨日はむるもなりき 挑隣
き 過 ゑとうねとやくてもさびく 鳥 孔 能然
い 現 蔡太

四 もの掛の部

く 百姓も麦ゝうるはく菜摘唄 去来
き 我年れふるもおりの人 初こゝゝ欠 作茶和
つ ひひ森の尾ふ蛇もふ 猫の恋 蔡太
ぬ 年 月裏へも義きゝ入りぬゝ ぬ 賣 櫻叟
ふ 去もやけきゝけふ身と 翁
む 人ゝ仰ゝ猿もる戦ふ社の風 珍碩
ゆ ふきゝれ雪ふ 誠の花もる面 壽伯
る 初雪れふゝ 袴ゝこの人 野水
て 先たの母 椎の朱もあり夏 朱立 翁
き 五 花の比嵯峨 嫁もの人ゝえざりき 秋村
い 現 行去を蛙 ほどなく 物もなし 也有

五 徒の部

く 初雪の朝 史邦
き 旅人の蘇耳ふきうん 至乃丈 千川
や 親音の甍やり川 花の雲 義
つ 雪とさふられぬ 平 ぬ 拈ぬ 延京 仝
ぬ 拈ぬ京命さらふ 蝶 ひとり 僊雀
ふ 朝さく〳〵 ふるひもとむきりくを 義
む 三尺寸 鯉を稱る兄 少 去の池 仙義
る 情玲の 粧ひ 三日の月 を角
ゐ 大霧ふ上 ゐのれめを 和之
き 去乃風 朝ふ物さ ゐくたりき 季史
し 沈 ひとと 時ちり去悲 夜の蘇 義

む 人小家戎買せゆ京ち年 忘 曲水
も 若 桃 菜 ふなる も 和や 蓋 野破
ぞ 鞆 巻 とる 是 ハ 高 荒 芽 大 根 引 義
の あ〳〵 ふと 芽 若 葉 の 日 乃 光
ろ 撥 き 吹 乃 月 う 春 さ の 郭 公 藻風
ふ 水 曹 社 痩 も ま ど 直 ら ね ふ 浪 の 夕 義
そ 逃 撥 〳〵 さ の ゝ 孤 ひ そ 蜆 う き 梅主
よ 永 ひ と り 月 社 長 若 よ 肘 ま ち 群長
と 余 乃 ち ま 〳〵 た ゝ と を る と け ん 乃 菊 和及
ん 色 籠 ま ち と ち ん 大 乃 桂 義
え 秋 の 茅 る 道 ま ら ん 田 草 原 義太
ゑ 傘 に 押 ち け ち る 柳 二 の 形 義

く き つ ぬ ふ む る き し
不 沉 重

六 そのの掛りの部

年のいそきちんさえ足袋ぞんせく　月下
ぬりしー墨はやふれて月ぞさん　子洞
ひくくやー木葉動きて秋ぞ　杉風
今宵ふくなたぞなのねわきん　梅翁
土用干花橘香ぞ小ぶん　貞山
月ぞもむ義はうんのうる野山　能順
子を洗ふうきをぞ天する稲岡毋　芝山
手ふきハ消ん涙ぞあつた秋の弟　翁
去神んとの薮吹風ぞ物つくり　狗也

く き つ ぬ ふ む る き し
不 沉 沉

〇北の掛りの部

松茸や赤ぬ木の葉去へだりたく　翁
つるさはふ風ふきをぞ北月　枳風
我たくいく人のまさきり　宜至
きぐれ神又松風のなぐおうぬ　北枝
大系や蝶はやくまん　滝月　丈草
きるくとぞ花芝うもやきつくさ　村鴻
ぬくく板の花の神ちる　翁
極本屋の学を巡り　吐月
袁乃灯ふ疾く出く花の書逝　能順
桶の梅はひとりあくー年れ書　猿雖

く を つ ぬ ふ む る ま き し

八 やの撰の部

本芳の情をやせぬく 玄北 年 義

更衣せ〜や 綿干し 苔の家 句空

尼の閑洞みやそろけ〜れ花 鬼貫

毛中世乃爆小深〜ぬ 古ごろ子 義

なる滝乃名みやせりあ人 時雨 如空

川端て猫りやきぐむ 暑乃夢 且精

玄来ぬと 柳やもゝる山れ家 木心

菊 紅葉 みやもゝげて流る夕り 千角

麦 沢の田植やもゝとき ほゝる時 許六

本のゝれて〜 花 義

く を つ ぬ ふ む る ま き し

九 切やの部

本のゝれて〜 菜つゝもやゝ 雨ときし 義

作り本乃糸武 ゆゝもや 秋の孔 嵐雪

ひくきゝ〜 水のあ人つやゝ川 嵐 沾徳

燕も鳴 戎もりぬや 苗代田 空山

ひと夢せ 沢ふとゝ〜ふや 郭公 義

順拵も余沢ゆゝ〜 ふゝむや 鶏合 千角

望ゝきれ肩ふ ちほ也や 文衣 乙也

面て一人さちもどるやゝきつもゝ 白雄

花うゝあり ゆゝや 火桶乃 拵 仏 存義

人清〜に吟き ゆゝや 矢漱の時 拾栗

山里乃名ゝ ゆゝゝゝ〜や 猫乃猫活 千角

(十) 疑のやの部

(く) 日の道や葵うるふく五月雨　義孝
(そ) 乙鳥や田植うちうえを馬の蹄　孝重
(つ) 霧やまち味噌こしふせくきりくを　義孝
(ぬ) 明星や揺さめぬ山のつら
(ふ) 名やおもふ今宵ふるぬ秋乃月　宗祇
(む) 綿弓や毘沙門の奥　義孝
(る) 煤掃やうちとをる山　秋却
(き) 山ゐ〜けるざ〜や雪き富士嵐　閑指　嵐雪
(う) 妻ゐ〜と家をやくを〜女郎花　荷兮

(十一) 歎息のやの部

ちもむ月や幾代を経きりくを　其角
ちるも又待るくを菊の花　吐月

(十二) 云び機のあく調ふやの部

切菓せぬうゑ物　宗祇
裸身小麻乃少ほひやを洗ひ　許六

(十三) 呼かゑる意のやの部

夕立や田植えめうれ神ゐうべ　其角
紫雲やいて〜ゑを乃い〜ロ乃　閑指

(十四) やゐの部

むざんやな甲乃下れさうぐを　義孝
色〜そゝ香に染〜やゐ花れ宴　貞重

(十五) 捨やの部

郭と里ちられ花寺乃子孫うや　義越人
雁この〻もあつふきけいうひきや
島ちく〻ふえよ浮せもこのちや　義

(十六) 餘情のやの部

名月や池残めりく夜もをぐら　義隨友
辛崎やとまりなるせく初時雨　支角
小坊主や松ちかられて山さくら　支考
灌佛や月出る寺寺ふり　有佐
五月雨やおりくいちいあるえこの　義
月花の見やはとれなるじ達　支考
うき草ちなえてや猫のぬきを喰

(十七) 何の掛りの部

いくたりうの時雨の夢ぬく鶯田の稽　文弟
たま人の蔦ちくねまん花の去　義
みよ世いふ貝の書　破笠
人を剪とちれをたくみぬけしの花　萍水
るびるぬちをとろ去のふ如帝花　暁山
五月雨ちるの紙菜よりも淀乃人　鞭石
舞振ていふ義度ゆを打ふる　野水
七夕といふる神よたちの面き　義芳
朝顔よりの寄いでし　角使　主角

(十八) 門ぞの結ひの郎

何事ぞ花乃乱人乃長うさ
ゑの母そ花ゑ殊数るゆそ 橘
誰人の凱陣よりぞ 沖なまん
朝貞て傘のくいほそ
義虫のいつうるぞ 帰り花
かつらきろ神いつぞ 夜乃雛
百ゆうきいうりのぞ 庵こうし

去来
祐甫
義古
暁雲
昌碧
玉角
木何
義古

(十九) 何の郎

大津絵の筆せぞ 発き何 佛
ちん下法りるる何ゑいつさやう

義
千代

夢せねゆ乃ゑ鄭ゑ 秋 却
住ゆうゑ 撞自表の赤こせ奥
たう身せ続をかう 華の松
出ゆ三日人ゆいう 猫の恋
何の赤と遠月ゑ 美葉山
笠島やいこ五月の 乃
此うちて古木いつ 撞乃恋
君いう永ゆやつ七 却
築地ゆるのうゆう 辣
花嫁ゆ 焼撞
猫の恋いゆる 君のうさゆ
嗅の羽のいくなこる 娘の盃根

法三
其禮
雄帆
貞佑
寶馬
義

此筋
梅義
周竹
李色
嵐蘭
義

(二十) 月と称字の部

夕られか何成ちらん　鶏　秋雪
いつ咲くまでいつ散やんびさの花　白雨
あれ神もいく世の秋をん　松の花　義
いふせん五人さ三つの初茄子　雪聲
時をぞれのうゝ咲ん　秋の虞さ　柳風

(二十一) 月餘情の部

遠ほうぬ里を何をう去れられ　義
いつまでこの雲ゝまぶまく帝子を　千那
水のうゝしたいつまでうてう雨蛙　正秀
面をきし雲のいづくう峰ろ雪　宗祇
ひと里ろ炭焼ハの中義　一井

(二十二) と称字の部

裾をりて菖蒲つゝ寒成つゝ寒らん　草枕　嵐雪
この螢田毎ろ月ふくゝ　義
猿蓑と活てゝ出けん　初松魚　仝
いつかゞ兎二里を来つゝん　峰鶉　百明
富士成ろ敷歌人もいつん　花ろ山　嵐雪
後の月ゝとゝ字活の巻なゝん　越人
炭焼のひとりぞあん　竈ときゝ
忘れゝゝ蛇ゝゝゝゝん　年女人　其角
山猫　淋ゝひしゝき　偽ほらん　吐風

て　ふ　を　む　も　の　こ　へ

(世三)　宝の部

玉苗不見命は長きこゝちせり　宗因
やさしかりし酒の肴りー這をけり　生角
初しぐれ猪も小義をかりけり　義
風のたてもつかりけり海は音　言水
人訪つて人も留るうす秋は苦　秋村
不見るうす秋は一本に見れり　宝馬
松とうの命は第は日と成こけり　不角
色くを不見ぬ菊つかりけり　別叢

て　ふ　を　む　も　の　ぞ　こ

(一)　祝言

(世四)　しの部

ちのこゝ入こゝ日も照ゆらゝ　土用干　寛麗
月重ふ山吹花の素新よゝ　其角
五月雨をあつ色こゝ家上川　義
の云へた春きし　秋は風　仝
月見乃たゝめ月門乃松　太来
色紙の梶義ゝ笠の影　軽舟
菱釜の白き蛙夏兼けゝ　尚敬
月きとのさゝけゝ年の暮　義

(世五)　二世一白のしの部

樊たてゝ竈　雨けゝけゝ乃月　古幽

(九六)月除時の部

箱根ゝ人人もあるらゝ今朝の雪　義

十月も霜なるとは雪もおそかはゝ　雁奴

梅ゆとむ人の紐とそ白ゝらゝ　素風

赤子なゝ供もつれゝ夜の雪　留女

(九七)三世のゝの部

人者と物ゝ人ハ秋ゝ風なりゝ　雲不知

山里も蓼ゝ菜ゝ梅の花　義

孫も子を法師ゆせゝ初松魚　沾峨

(九八)二世のぬの部

風ゝくさゝ草の書ゝ せ鶴　養佐

降ゝ物ゝ今月にゝぬ月の面　尚白

(九九)二世一句のぬの部

百合乃花をゝ見ぬ先ゝふきぬ　其角

(三十)二世のきの部

糸萩風よせゝをはのせてき　嚴阿

ぎゝゝ水のせゝ訪ゝむゝの委　鬼委

(卅一)二世の又の部

小夜時ゝ雨いゝまこひゝゝ又咄　津冨

又とあゝ人ゝゝるけゝハ名残ゝ　作者不知

(卅二)牧二やゝの部

ひゝゝゝと牧ゝ嘉ゝゝや女帝法　義

汐秋のゝ和なのゝゝやゝゝうん　公

(卅三)清ゝ二やゝの部

唐の紙も絶くなりぬ　嵐雪
仏法不知

閑よりなり我家成　猫乃つまれて

(卅四) むこ二ゆうの部

洗濯のきぬはまめこ　柳乃葉　薄芝
嫁人と家名はまもむ　初しぐれ　翁

(卅五) こそもの機の部

見さ〳〵こそ命もはく事夕もとみ　兎士
かぞへても年こそこつせ除夜の夏　閑夕
楽山子こそや矢ぶ成こそ放て秋の蓄　篤命
炉へ人ハ猴こそ久孫　桃の花　翁
孫の人見を樂こそ夕ぶ西　素丸
義と見さ〳〵こそこそめ夕しぐれ　き角

(卅六) 月除情の部

白魚さ〳〵あるこひなるこそこそこみなれ　義
さ見ハこそあれ月紅まれ新の宿　子政
営れ時ハこそ春　安乃ゆき　篤對
末あこそもよきりふこそ競馬　梅月
一ッ家乃人のるさけも花ふこそ　芦皓
蚊帳の内美なれいこそ富士の山

(卅七) 下総の部

岳志ハ我ッ塚こなけ郭公　奥州
里の子の柿杉の世半の歌　義
歩の子成命ふるれこそ行乃姫　東山
玉虫猫よたえるこそ孫鰹の味　北平

(へ) 合歓の木は蕊こもいと星の乳　義
(め) ゐ言葉離もあるれめ虎ゐ爲　嵐雪
(れ) 西行のゐらしもめ毛　松乃露　義
(る) 花のある草めくきるる書虫　左廉
(よ) 山寺のさひしきつ事よ　蛞　義

(ち) 餘情の句の部

(ま) 梅若菜まりころ宿ろろ汁　義
(す) れいくとたてのう花の芳地山　貞室
(サ) 帰る乃紅根ハよもゆて義の義　叶月
(イ) 蛙墓もまさりくしちゆ事　杉風
(ア) 送れつおろつはくへ水芭の杖　義
(ク) 五ゆも赤ふりまて蛞愉　凡兆

(ち九) 文字余りの部

祐ゆ我小蛙せゆや坊ゐ妻　義
きりくもと嵐の完ゆく事孫ゐ此　嵐雪

(ち十) 言葉ゐ結ふの部

けふとゐ花の赤ヒ夏衣　浪雪
青丹秋花ア伊の車坂　空山

(ち一) ゐもの部

月ゐ汐我待く入ゐ三日の海　梅義
入月ゐたくもゐ藤ゐの故ゐゐ　左義

(ち二) 久の部

江戸一の名ちゐの久ち松魚　宝馬
明神もさゐれりの久古坂帳　維舟

㊸ さぞの部

人丸のさぞはてきん沖ゝ帆小　紀文
如山ゝ茸　猪ゝさぞ小松ゝけ　立圃

㊹ さその部

盃ゝ泥なおゝ　蕪村
眠ゝその松人ゝさそそ　蕪村　園女

㊺ ゆゝめの部

世ゝ雲ゝ雲ゝけものなゝ　蕪村　西園
ゝゝぬゝ庵　歌ゝゝ初蛙　素丸

㊻ ゐ巴ーの部

ゝくゝてゝあゝゝたものゝ庵ゝゝ　蕪村
風ゝ拾ゝひさゝもゝ　戎秋　抑　云来

㊼ 巴ーのけ部

いゝとゝれゝゝ秋ゝ庵ゝゝ　浩　拾　宇古
宿ゝゝん若ゝゝゝれゝ　費之　素堂

㊽ 大巴ーの部

ゝゝたゝゝと雲日のみゝゝ玉津島
ゝにのせゝゝ富士ゝ見ゝる遠月　洗　仝

㊾ や武やゝゝの部

夕新や杖ゝいゝゝくのゝゝゝ　蕪村
海棠やゝ雲ゝゝゝゝゝ咲ゝゝ　乙由

㊿ 重てふをその部

初真素堅ふや切ゝん　蕪村
花ゝ家ゝ里ゝ川ゝ原ゝ　支角

㊄ 二字切の部

うきもちつ。笑ひもちつん。二ッ星　風山
日もらさぬ。ちやゝ丹よ家れ。女　桃機　風虎

㊅ 三字切の部

ちゝ玉か。何ちやゝ岡へ。ハむくけ丸　立圃
ちゝ丸よ。何の事も作。梅の花　夕山

㊆ 廻文

今朝さんと春光や菖蒲の冨田酒　千角
むゝ萩ち風も井りせう萩ちゝん　宝山

㊇ 物の名

雉子（鶉）ちゝ（雲雀）ひゝきう（鶉）時鳥（日）
山と和（山城）ちゝろきぶ（伊予）君の言　丸（丸）うい　菊峰
保吉

短句丸ゆ留

小掃縄手を人ろゆく　丸申　仝
門徒の家れうかさうせん　丸申　仝
伏丸の焼場煙ちう　丸申　仝
はと唐門の箔ちけ炎　丸申　仝
細ゝ何ちゝ新の鮎のちふ　丸申　仝
苦四ゝ系日ゝ　丸申　仝
送ゝ火ひちつふもちゝき毛　丸申　仝
丸ちの筏　彼ふゆ新　丸申　仝

他去雪

五五 和歌ぞの撰の部

く 古今
世とともの小流きてぞ〻く泪川 なも氷らぬこゑとなりけり

も 千載
真菅かゝる山ちかゝる嶺ゝ身さへ苔ろかゝりてぞさへ

つ 後撰
天の川岩こゑ浪のたちぬつ秋ろ七日のゆふをしまり

ぬ 不古今
撰 花ちくちりぬるもあるもあしく人のこゝろぞ風もふきあへぬ

ふ 古今
袁きこぬゆゑ人ちゑ人とも嘗のなるぬきりはあ〻しこゝろぞ

む 古今
我のゐちゑ数のうつゝあるゝそもむ世我宮法山と人ちゑ人ちゑ

る 新拾遺
あ〻ゆゝれ山路の月小峰紙〻かられ袖よゑゐぞのこゑる

き 古今
袁れ日ろ光ゝ小あ〻る袁ゑるまとゆゝちのなるとゑるごゝひゝき

い 古今
世川ゝすゝちゑ紫ゑゝ秋袁山ろ袁けの水ぞ今まゝるらし

五六 月七の撰の部

く 古今
袁たゝくハ花ゝちゝやゝろらん白袁れかゝる枝ゝうゝひちの峰

つ 続拾遺
人ちゝぬゝやゝるゝてゝれぬゝんあゝまゝとゝのおゝろけふたゝ

ぬ 不古今
袁ゝ山ゝ世の山ろあゝ袁ゝふゝあゝ入ゝ人のおゝと法ゝ也ゝ世ぬ

ふ 千載
夕ゑゝや杖ろ袁我ゝ先ゝゝんゝけ入神ゝ嶺のおゝきゝ人

む 大和物語
山里ゝ我ゝとゝゆゝゝつゝれ路の雪のゝふゝ〻ふゝゝるゝむ

ゆ 新後撰
箱根路を我ゝ袁ゝれいつの海や沖の小島よ波のゝとゝ秋ろ袁

る 千載
袁嫌路の萩や男蒹のつゝまゝゝん花咲ゝとゝ袁ろ袁ゝる

そ 千載
結ふゝまゝゝ新ゝゝれゆゝ山の井れあゝてゝも身れゝゝふゝきゝまゝろ

き 古今
ひゝとゝゝて物をおゝりゝいゝ秋の田の橋蒹れそゝとゝいゝ人ろなゝき

い 古今
也はゝふ路ゝ袁の袁ゝゝ神ゝけゝく山鶏の人のかゝゝゝるゝらゝ

五七 月やの掛りの部

く 古今
も 続後撰

去歳たるひく山乃橋もねうろろんとや色かそりゆく
浦風やそろ小波ら〻濱松のねよのうれくくなくゝるゑ

う 拾遺
ぬ 不古今

あくにまさる家あるぬ月と山の端の遠の星ゆへ遥とやまり
水乃面ゝ有る五月れうき草のうゑとの玉や袖を見てゑ

ふ 続拾遺
む 続古今

老のむるに命れのふる物なりゝふ年我ゆくゝあんとやろゝ
浦玉もうるゑつゆ玉やさのむ杜風の身ゆ家ゑ散ゝ麻も帰ゑ

る 後撰

時ゑるきそゝ蔵ゝや帰ゝるゆれゝ別のとゝきみやと我

き 後撰
い 後拾遺

嶺ゝうりぬるらん袖の雲ゑゑ家ゝおりひ乃袖やすくゑ
いそゑまゝ我はみゝ袖ゝゆゝ山色ゆやゝゝ山ふきの花

五八 月何の掛りの部

く 古今
も 後拾遺

蓮葉れふこりにきまぬゝゝ袖ゝゝ嶺ゝとゝあゝゝゝ
ひとゝゝにゝるゝなゝさそゝゝゝむゝ玉をゝと二筋ゝおゝひゝ乃ゝゝ

う 拾遺
ぬ 不古今

夏れ袖ゝ月袖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
交葉ゝゝ老ゝゝにゝゝ玉ゝゝ時ゝゝゝ我葉ふひとゝゝゝもせゑ

ふ 千載

流水我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

む 続後撰

なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

る 古今

袖ゝゝ風の霜ゝふゝれゝゝ我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

き 古今

流つせの井ゝゝも流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ほ 拾古今

ゝゝ雲の袖ゝ山れ橋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

㊐ 撰集

㊑ 後撰

㊒ 古今

㊓ 古今

㊔ 後撰

㊕ 後撰

㊖ 古今

㊗ 後撰

㊘ 後撰

㊙ 後撰

(五十九) 月とその樹の部

君ちたく神たちのうちやそくらん遊女月をもうつしとこそきけ

あかりぬ我身と思へと秋の夜とやくこそあるせはきあるらに

天城踏はりこのくの小萩ふるをおるし風と待と君成こそきて

雲の夜の間ちのやうす柿の葉ちこそ見えそ霜まやへやくくる

打注ぎ六神こそ白へ柿のこれあくやこそうくひもあく

雲の鶴ふんぬ成ふもやぬ身ふ為ちつまて身とこそ

山里ふひとうふるむるんこそ花のある世ものとけうけれ

あひもそひふけ紅もそひあうしぬ思ふるこそ身ふるくしう

松の根ふ風の声へと虫色てハ立田姫こそ秋ひくら

(六十) 月下知の部

㊚ 古今

㊛ 古今

祭めて〜言れるちうそ女郎花紙ふきと人よのくこれる

萩の露ふぬんとれいけぬ〜そ人を枝ふのうへよ

(六一) 月とその部

秋長

夫木

ちくしきいきれ松ふ陸さるともそる扇の風ふこそ

牛の子ふふまるふ庭のくうふ有いれくく身をる歌こそ

(六二) 月重てふとその部

古今

秋古今

虫やうう我やいろんおりをつ「虫」「鹿」「蛙」「蛍」

夜やふ為ちうそきのいあひのまうう為ふ為

㐂 假名ことのはの部

い 以 いふ 往 いそれ 謂 いちち 逸物 いさきうー 幼
伊 いへ 家 いだえ 嘶 いすえ 礎 いゆーち 過年
易 いひ 飯 いらく 答 いざひ 誘 いきざり 憤

ろ 呂 ろう 籠 ろくね 六位 ろうく 漏刻 ろくやう 緑青
易 いひ 飯 いらく 答 いざひ 誘 いきざり 憤

は 波 たへ 延 たへん 稜 たふぞ 匹 たうぞん 判官
破 たい 拝 たらひ 拂 たらひ 計 たちたえ 大角

に 播 たえ 生 たえん 延枝 たうふ 報答 たちたえん 花宴
仁 ふえ 庭 ゆひそ 新葉 ゆずの 入梅 ゆちうり 鶏

ほ 爾 ふえ 煮 ふせる 餅 ふぎらひ 販 ふぎうり 饒
兒 ふね 鳥 ふねひ 香 ふうど 女御 ふでやう 人長
保 ふい 本意 ふうる 穂末 ふうう 奉公 ふうたび 搢

寶 ふえ 吹 ふぐ 反故 わるえ 微笑 ゑんしやう 本性
報 ふう 頻 ふぐえ 上枝 ぐうえん 牡丹 ゐのもる 朗見
平 へう 表 べうう 別堂 へんどう 變化 へんたう 偏執
登 ほう 問 ほうー 遠 ちのひ 調 ちうり 滞
知 ちえ 千枝 ちひ 誓 ちかう 小 ちいさー 聽聞
利 りう 流 りうん 輪面 りんめん 西部 りうしぶ 律令
奴 ぬひ 縫 ぬひ 拭 ぬぐう 捪 ぬきうる 扣
留 るね 類 るうい 流浪 るうろう 類葉 るねひう 類病
遠 をへ 終 をうる 女 をのえ 谷柄 をうえへ 女郎花
袁 をひ 甥 をうう 婿鳥 をうひ 前日 をきのうー 納殿
小 をえ 卒 をうう 男 をうえ 時延 をのうべ 童
和 わう 王 わうえ 變若 うすれる 泉井 いいー 分明

倭 わうこ
九 われ
吾 われ
若 わかぎみ
吾家 わきへ
辨 べんさう
綿帽子 わたぼうし

か
加 かうそ
川 かはら
可 かうそ
顔 かほ
甲 かうへ
斐 ひ
蝙蝠 かはほり
皮鞭 かはむち
改元 かいげん
杜若 かきつばた

よ
與 よそ
夜 よる
太 たへ
堪 たへ
給 たまへ
齢 よはひ
丹波 たんば
立枝 たちえ
料理 れうり
揃 そろ
費 つひえ
手巾 てぬぐひ
手端 たなはし
連花 れんげ
續 ぞく
兵 つはもの
鹿杖 かしづえ
粧 よそほひ
大徳 だいとく
手巾 てぬぐひ
立枝 たちえ
連花 れんげ
續 ぞく
兵 つはもの
久しう ひさしう
流星 りうせい
立住 たちすみ
徘徊 はいかい
連状 れんじう
副車 ふくしや
九折 つづらをり

た
多 たつ
鶴 つる
他 た
絶 たえ
堪 たへ
丹波 たんば
手巾 てぬぐひ
手端 たなはし
蓮花 はすのはな
短冊 たんざく
徘徊 はいかい
連状 れんじう
副車 ふくしや
九折 つづらをり

れ
禮 れい
寮 りやう
料理 りやうり
揃 そろ
續 ぞく
兵 つはもの
蓮花 はすのはな
續 ぞく
兵 つはもの

ろ
曾 そ
添 そへ
蝋燭 ろうそく
鹿杖 かしづえ
流星 りうせい
立住 たちすみ
徘徊 はいかい
連状 れんじう
副車 ふくしや
九折 つづらをり

つ
都 つ
露 つゆ
辨 べんさう
綿帽子 わたぼうし
頃 ころ
杜若 かきつばた
改元 かいげん
反歌 はんか
流星 りうせい
立住 たちすみ
徘徊 はいかい
連状 れんじう
副車 ふくしや
九折 つづらをり

通 とほる
杖 つえ
津 つ
面 つら
仕 つかへ
戊 つちのえ
革 かはぶき
ね
稲 いね
捻 ねぢ
遣 つかはす
飄 ひらひら
な
奈 なに
猶 なほ
猫 ねこ
人 ひと
鯉 こい
ら
良 ら
勞 らう
生業 なりはひ
雷鳥 らいちう
む
武 むし
室 むろ
習 ならひ
蠟燭 ろうそく
向峰 むかふみね
當腹 むなぶね
死 しに
村 むら
禮紙 らいし
向 むかふ
嫡 むかしめ
生質 むまれつき
夢 ゆめ
棟 むね
報 むくひ
聞人 ぶんじん
逆風 ぎやくふう
う
宇 う
上 うへ
潮 うしほ
群居 むれゐ
打延 うちのべ
上天 うてんじやう
有 ある
魚 うを
許 ゆる
卜筮 ぼくぜい
浪人 ろうにん
雲 くも
飢 うゑ
空 そら
移 うつり
鰱 ふな
ゐ
井 ゐど
井戸 ゐど
田舎 ゐなか
山猪 ゐのしし
十夜 じうや

の 延 のち 蕚 のぶべ 延 のさまし 宣 のびたし 揉

れ 於 おや 親 おぞえ 覚 おもおえ 簡 おもわ 面白

意 おか 大 おおひ 思 おもわけ 公 おのづから 自

隠 かくし 生 おさえ 押 おさえく 衰 おとろ 御座

く 久 ひさ 桑 くわ 天雲 くもるる 紅 くれなゐ 小角

九 ここの 崩 くづれ 加 くはへ 褶帯 くたびれ 眷属 くるのぐ

玖 くの 悔 くやし 狂 くるひ 種 くさ 栗刺 くりのいが

や 也 やか 八百 やおよろず 灸 やいと 和 やわらぎ 八日 やうかのひ

夜 よる 谷 やつ 雇 やとひ 養 やしなひ 山下風 やまおろし

野 やの 童 やさ 八幡 やはた 漸 やうやく 峡 やまあひ

ま 末 まつ 猛 たけし 迷 まよひ 賄 まかない 妄執 もうしゅう

け 計 けい 含 ふくめ 羨 うらやむ 孝養 けうよう 蹉 つまづく

ふ 不 ふ 不破 ふはし 不幸 ふこう 鳥 ふなどり 蘭 らん

と 巳 み 聲 こえ 氷 こおり 頃 ころ 更衣 ころもがえ

故 ゆえ 越 こす 悚 おそれ 理 ことわり 希 こいねがひ

枯 かれ 鯉 こい 梢 こずえ 心得 こころえ 今上 きんじょう

え 江 え 縁 えん 衣紋 えもん 栄花 えいが 葉鶏 えびづら

て 天 てん 岩 いわ 斬 きる 助辞 てにをは 朝夕 てうせき

あ 安 やす 敢 あへて 償 つぐなひ 相生 あいおい 土鴨 あひがも

阿 あ 青 あを 篤疾 あつしい 誂 あつらへ 會釋 えしゃく

婀 あで 肖 あやかる 與 くみする 竹刀 しない 赤卒 あかがしら

さ 左 ひだり 副 そへる 栄 さかえ 鋳 いる 佐官 さかん

佐 たす 多 おほい 境 さかひ 盛映 さかえはえ 笙 しょう

作 つくる 才 さえ 支 ささへる 拾征 ひろひとる 道祖 さえのかみ

き 伎 きそ　際 きわ　鏡 かがみ
貴 きこえ　消 きえ　吉祥 きちじょう
奇 きず　疵 きず　極 きわめ　几帳 きちょう　淨 きよし
ゆ 由 ゆえ　故 ゆえ　行方 ゆくへ　行末 ゆくすえ　行く ゆく
め 女 めの　姪 めい　盲 めしい　面目 めんぼく　名残 なごり　童女 めのわらべ
み 美 みえ　覧 みる　見 みる　紳士 しんし　交合 まじわり　陸奥 みちのおく
身 みち　三輪 みわ　三十 みそじ　自 みずから　名聞 みょうもん　芝 みぎわ
し 志 しる　潮 しお　後 のち　下崩 くだけ　後言 うしろごと　朝 あさ
え 恵 えみ　笑 えみ　笑顔 えがお　繪合 えあわせ　色 いろ　嘲 あざけり
會 あう　犬 いぬ　回向 えこう　碑 いしぶみ　醉歩 よろめき　狗尾草 えのころぐさ
田 たい　醉 よい　画工 えかき　膝 ひざ

ひ 比 ひえ　冷 ひや　翻 ひるがえり
も 毛 もず　鵙 もず　用 もちい　催 もよおし　翫 もてあそび
せ 世 せい　鶏 せき　節會 せちえ　消息 せうそこ　約 せく
す 寸 すん　居 すわり　住 すまい　水干 すいかん　順 すなほ

楓川亭にたゞ八吉一の文を便りて
夏の晨長き心ちする明やすき夜を
月に涙と志のむる程乃恨ふかく出を
尋ぬる窓に川せを雲をたゝしふか
丞に言乃葉をたなゝつとめと久を
一巻ゝ書ぬるを芝苅賤茂

塩焼蟹と此道小志しなる人の絮かも
あらん乎少し予に云おもむきを問るに
いとゝ〳〵ゆらかすして世小身変乎之
ゆ乎きをと集け冊とるを元ゆ書き
形つ永へ子少を記事のゝ

丁未の首夏　墨之因　夏椿

楓川亭水旭選

嘉永元戊申七月

福井町壹丁目

山﨑屋清七

神田旅籠町壹丁目

紙屋徳八

山下瀬川屋敷

中屋忠左衛門

四十四ページ